

## 「南京大学春季中国語研修参加報告書」

京都大学文学研究科修士2年 中原佑真

今回の派遣は中国語能力の向上という面で一定の成果を得ることができたと同時に、中国での実際の生活を体験できたという点で意義深かった。報告者は南京大学海外教育学院という外国人への中国語教育を専門に行う部局の中で中国語教育を受けると同時に、授業のない週末を利用して泰州・北京・上海・揚州へ旅行した。特に泰州では知人の結婚式に参加して中国の民間の風俗に接することができたし、北京や揚州で、南京とは違った雰囲気を感じられたことも良い経験になった。

また、報告者は上海では著名な学者・銭大昕の故居を訪れることを目的に嘉定区へ行ったが、附近の嘉定県学では唐代の墓誌銘や元代の学校設備修繕記録など多数の石刻を直接目にすることができ、中国の文物資料の豊富さ、歴史の重厚さに触れることができた。こういった石刻の文字は早くから書物に移録され、日本での研究活動の中に於いても日常的に触れるところであるが、今も残る実物に触れることができたことは報告者に大きな感銘を与えた。

中国での生活では、人と人の距離が近いことを強く感じた。たとえば地下鉄の駅では知らない人から「〇〇に行きたいから切符の買い方を教えてくれ」と話しかけられることが何度もあり、飲食店で食事をしていても新しく店に入ってきた客から食べているものの名前や旨いかどうかをしばしば尋ねられた。揚州から南京へ戻る鉄道の中でも、報告者が揚州で買った『三字経』（中国旧社会に於ける児童教育書）を読んでいると近くの席の夫婦から突然、「その本は私も知っている本だ、だがその本は繁体字だから君は読めないだろう、ちゃんと簡体字の本を選んで買いなさい」と話しかけられた。報告者は日本から来たから繁体字が読めることを説明し、結局彼らとは南京に到着するまでずっと日中の文化や経済のことを語り合った。彼らはそうして見知らぬ人と話すとき、多くの日本人のようなためらいや遠慮を全く見せない。地下鉄やバスでは子供連れや老人などに席を譲るのは日本よりも当たり前のごときとして気軽に行われているし、誰かが荷物を忘れて降車しようとするとき周りの人が大声で忘れた人を呼び戻す。

中国では知らない人との垣根が低いから、たとえば店員は直立不動ではなく客に話しかけられるまでスマートフォンでゲームをしているし、話しかけても貼り付けた営業スマイルではなく面倒くさそうにしたり大声で聞き返したりする。また、それに対して態度が悪い、などとわめき立てる客もいない。だが、それは中国人の仕事がいい加減だということにも、中国人が自己中心的であるということにもならない。たとえば印刷製本屋の店員は作業中ずっとネットサーフィンをしていたが仕事の速度は速くて出来もしっかりしていたし、厚すぎて製本機に入らなかったため分冊すると、支払いの時「君は元々一冊にするつもりだったんだから」と言って元々安い製本代をさらに安くしてくれた。心性の高下の問題ではなく、社会形態の違いに過ぎないのである。このようなことを中国人の友人と話すと、ほら、中国は遅れた国だろう、とよく言われるが、報告者はむしろ、店員が顧客を信用している、すなわち、相手を得体の知れない存在として扱わず、自分と同じ理性が備わった人間であることを承認している証左ではないかと思う。日本社会の諸問題を考える時、外国を単純に模倣すればよいという問題ではないが、少なくともこういう国もあってそこではこういう文化が成立している、ということを感じていることには大きな意義があるのではないかと感じた。

今日に於いても世界では少なくない数の人々が、〇〇国は我々より文化が遅れている、〇〇人は我々のように優れていない、というようなことを平気で口にする。そういう考え方に対して二つの文化の間に優劣関係はそもそも成り立たない、と反論することは簡単だが、その言説は異文化の中に一定以上身を置いて自分自身の体験として実感しない限り説得力をもたない。多くの人がこのような留学の機会を得て、自分たちと異なる文化を能動的に理解できるようになる将来に期待したい。